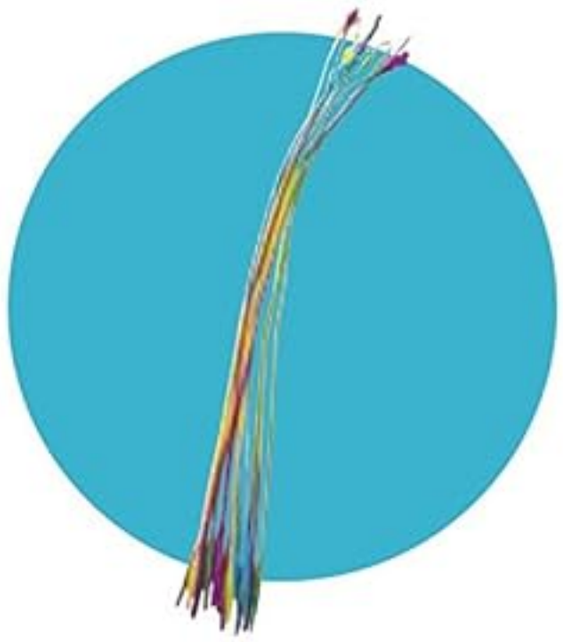
オークラ出版



子どものための ニッポン手仕事図鑑

監修　大牧圭吾　ニッポン手仕事図鑑編集長

100年後に
残したい
職人の技

はじめに

この本を読んでくれるみなさんに、はじめに知ってほしいことがあります。

これから紹介する職人さんたちは、とても素敵なお仕事をされている人たちです。

でも、その素敵なお仕事も、職人さんたちだけでは続けられません。

職人さんたちが毎日お仕事をできるのは、たくさんの人たちに支えてもらっているからです。

そして、モノをつくるために必要な資源を、日本の豊かな自然から恵んでもらっているからです。

素敵なお仕事をする人は、人を大切にできて、自然を大切にできる人です。

そのことだけは、ぜひ覚えておいてほしいなと思います。

みなさんは将来、どんなお仕事がしたいですか？

日本には、みなさんが知らないお仕事がたくさんあります。

さあ、さっそく職人さんたちに会いに行ってみましょう！

ご家族、先生へ

本書を出版させていただいたのは、本を読んでくれる子どもたちに、職人になってほしいからではありません。

大人になったとき、職人を目指す人、職人をサポートする仕事に就く人、職人がつくる商品を日々の生活で愛用する人、職人が暮らす地域に観光で行く人……。子どもたち一人ひとりに個性と価値観があるので、日本の文化や伝統との関わり方もそれぞれ。子どもたちの進む道を、無理強いするつもりはありません。

しかし、日本にはたくさんの素晴らしい手仕事があることは、しっかりと子どもたちに届けていきたい。

なぜなら、自分が暮らす地域を、自分が日々手にするモノを、そして自分を支えてくれる人を大切にできる心を、手仕事の世界を知ることを通して、育むことができると信じているからです。その結果として、先人たちがつないできた日本の手仕事が一つでも多く未来に残ってくれるのなら、こんなに嬉しいことはありません。

だからこそ、ひとつだけ個人的なわがままを書かせていただくと、子どもたちが日本の素晴らしい手仕事に触れる機会を、保護者や先生たちに作ってほしい。

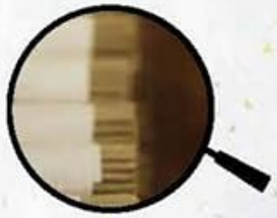
そしてもし、目の前にいる子どもが自分の意志で「職人の道に進みたい！」と勇気を出して言ってきたら、その道に進むことへの心配もあるかと思いますが、ポンッと背中を押してあげてほしい。そんなことを願って、本書を監修させていただきました。

本書は大人も興味深く読める図鑑になっています。保護者の方々、先生の方々にも楽しんでいただけると幸いです。

ニッポン手仕事図鑑　大牧圭吾

コレから何ができるかな？

みんなで一緒に考えてみましょう。



杉から何ができるでしょう？

お墓まいりの時に
ご先祖さまにお供えするものです。

答え→16ページ

コキアという植物から何ができるでしょう？

ゆかのゴミをそうじする時に
使うものです。

答え→46ページ

竹から何ができるでしょう？

魚をつかまえる時に
使うものです。

答え→48ページ

蚕（かいこ）のまゆから何ができるでしょう？

みなさんが毎日
身につけているものです。

答え→28ページ

お米と水から何ができるでしょう？

秋田の郷土料理に入っている
おもちのような食べものです。

答え→56ページ

亀のこうらから何ができるでしょう？

髪をとめるための道具です。

答え→64ページ

那須楮（なすこうぞ）という植物から何ができるでしょう？

昔の本や照明に使われるものです。

答え→68ページ

そばがらから何ができるでしょう？

夜寝る時に必要なものです。

答え→86ページ

玄昌石（げんしょうせき）という石から何ができるでしょう？

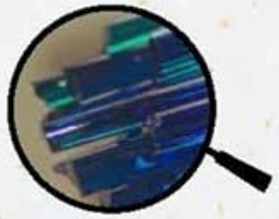
書道をする時に使うものです。

答え→110ページ

赤松という植物から何ができるでしょう？

夏の夜に遊ぶものです。

答え→114ページ



珪砂（けいしゃ）という砂から何ができるでしょう？

建物の中と外をへだてるものです。

答え→124ページ

線香花火職人の手仕事

人が手で持って楽しむ花火を手持ち花火といいます。線香花火もその一つです。一時期、日本の線香花火作りはなくなっていましたが、それを復活させたのが「三州火工」です。職人たちが一本一本、手で縒って作っています。

同じ職人が同じ量の火薬を入れても、表情がちがう線香花火

カラフルな和紙を手で持ち、さまざな表情の火花の様子を楽しむ線香花火。その歴史は古く、江戸時代に和紙の中に火薬を入れ、それを手で縒って作る今のスタイルになりました。「三州火工」で花火職人として働く稲垣さんは、「線香花火は、すべて手作りです。同じ職人がはかりできちんと火薬の重さを測って作っても、燃やした時の火花の表情はすべてちがいます。それは今も昔も変わらない、手作りのよさです」と話します。

着火から燃えつきるまで、ストーリーが楽しめる線香花火

線香花火は、火をつけた時から燃えつきるまで、火花の形が時間とともに変わります。「着火した線香花火は、火薬が燃えつきると火球になり、そこから牡丹、松葉、柳、散り菊と形が変化します。条件によっては変化が途中で止まったり、火球が落ちたりすることもありますが、なんとなく『起承転結』があるので、人の一生にたとえる人もいます」と話す職人さん。「火花の変化の仕組みは今もまだわかっていないようです。そんな不思議や情緒がある線香花火だからこそ、多くの日本人の心に染みつき、愛されているのかもしれません」。

「着火した線香花火を、
人の一生のようだという人もいます」

一本一本、和紙を手で縒って作る

線香花火は和紙に火薬を入れ、それを手で縒って作ります。職人さんは、「すべて手作りなので時間はかかるけど、お客様から『やっぱり国産はいいね』と言われると、うれしくて」と、そのよろこびを教えてくれました。職人として一人前になるには、5～6年かかります。「でも、わたしはまだまだです」と、職人さんは話します。

たくさんの人たちが協力して復活した、線香花火

今は線香花火のように、手で持って楽しむ花火のほとんどが海外で生産されています。そのため、一時期は線香花火を作る職人が、国内にまったくいない時期もありました。消えかけていた線香花火を復活させたのが、東京都台東区にある花火問屋「山縣商店」です。手持ち花火を製造する「三州火工」の職人たちに呼びかけ、数年をかけて復活しました。職人さんは、「100年後の線香花火がどうなっているのか、わたしにはわかりません。でも、花火を楽しむ文化は残していかないと」と、今の思いを語ります。

安全第一で、きれいな花火を作り続ける

花火は、火薬をあつかう仕事です。職人さんは、「この仕事は、一歩まちがえると危険が伴います。危険と安全を切り分けて、線香花火を作っています」と、安全に対する思いを教えてくれました。

「花火で遊ぶ文化を、また復活させたい」

街のあちこちで、花火を楽しむ文化を

昔は、いろいろな場所で花火ができましたが、最近は花火ができる環境が減り続けています。職人さんは、「火を使う花火は、使い方をまちがえると危険なものです。とはいえ、子ども達が花火の楽しさを知らないまま大きくなるのが、心配で」と、悩みを話します。「だからこそ、子ども達に花火を通じて、火のあつかいを覚えるような教育を広げたい。夏になると、街のあちこちで花火を楽しむ子ども達がいる。そんな文化を、また復活させたい」と、意気ごみを話してくれました。

使う材料も、国産にこだわった線香花火

線香花火で使う火薬の「松煙」は、赤松を燃やして作ったススを集めたものです。今は国内で、「松煙」を作る業者も少なくなってきています。

→

線香花火で使う火薬の量は、0.1グラムです。火薬の量が多いと、最後にできる火球が落ちてしまい、少ないと火球ができにくくなります。

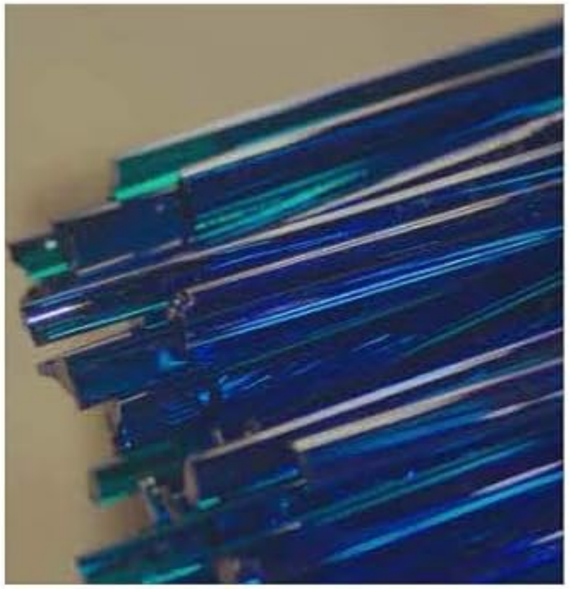
ガラス職人の手仕事

大阪府にある「佐竹ガラス」は、ガラス棒を作る工場です。色とりどりのガラス棒は、ふつうのガラスよりもやわらかく細工がしやすいため、とんぼ玉やビーズの材料として使われています。

人の力で作る、それが一番効率がいい

ガラス職人たちは、長い鉄の棒を溶解炉のつぼに入れ、溶けたガラスを巻きつけます。「ガラスは重いし、炉の熱もあるので作業場も暑い。そんな中で、ガラスの塊を引きのばしながら、ガラス棒をほぼ同じ太さに仕上げるのは本当に難しい」と作業の苦労を話すのは、社長の佐竹保彦さんです。「機械でやれないこともないだろうけど、大がかりな設備が必要です。人の力で棒の先にガラスをつければ、材料を変えるだけでガラス棒になる。それが一番、効率がいいんですよ」。

「人は財産。コツコツ作ることが、こだわりにもなる」



まじめな人じゃないと、もの作りはできない

ガラス棒の材料は、珪砂という砂です。これに、金属を混ぜて色を出します。工場には160色以上のガラス棒もありますが、さらにちがう色の棒も作ることができます。「人の力でやる意味は、できた棒が一本一本すべてちがうことです。それを調整するのも、人の勘です」と話す、佐竹さん。「やっぱり人は財産です。コツコツとやるまじめな人じゃないと、もの作りはできません。それがまた、ものを作る人たちのこだわりにもなっていると思いますね」。

熟練の技で作られている、ガラス棒

溶けたガラスを細い棒のようにのばす「生地引き」は、熟練の職人が担当します。耐火レンガのレールの上で、水あめのようなガラスを一気に伸ばしながら形を整えます。

国の「登録有形文化財」になっている工場内の工房では、ガラス棒をバーナーで溶かして作る「トンボ玉」作りのワークショップ（体験教室）も行われています。